「『キレない』子　３歳までの……」の記事を目にして

先日、新聞に「『キレる子』にしないためには乳幼児期の家族の愛情や生活リズムが大切だとする提言を文部科学省の『情動の科学的解明と教育等への応用に関する検討会』がまとめた。」とする「－『キレない』子－３歳までの愛情　大事」の記事（２Ｐに添付：参照）を目にした。

記事を目にして「乳幼児期の家族の愛情や生活リズムが大切」と、こうも簡単に報道するだけでなく、乳幼児期への愛情ある育児とは、どういうことかにも触れてもらいたいと思った。

例えば、結果として虐待に至る親とて、「愛情あるしつけと思ってやった。」と云うかもしれない。また、親が愛情と思い、あれこれかまい過ぎることからの「強迫性障害」の子どもの増加も問題になってきている。

最近の「乳幼児期の空洞化」の側面の問題には HP 上でしばしば触れている（「雑学 BN」時系列［7］　2005.03.25.「『井勘定の子育て』でも、いいのでは……」、時系列［8］　2005.06.20.『自身を他者化する視線の形成過程』を求めて…」、 時系列［9］　2005.09.19.「『なぜ、その子供は腕のない絵を描いたか』」を読んで」、等：参照 ）が、親が愛情のない育児をしているというより、愛情ある育児の親や大人のとらえ方が十分でないからでないかとの印象を抱いているだけに、こうした記事を目にすると、「自分の愛情が、まだまだ足りないのかなぁ～」と苦悶する親がまたまた増えるのでないかと危惧せざるをえない。

私的に表現すれば、「何も分からない、知らない我が子だからと、何でもかんでも責任をもって育てなければと思う前に、既に一人の人格ある子ども」という、我が子へのとらえ方が親（大人）に必要のように思える。

全くの私製和製英語（？）で表現すると、“　A child is not parents' ,but a person,first. ”かな？？

いずれにしても、親も一人の人間として心豊かに生きたいのであれば、乳幼児期に限らず、子どもも成長過程のその時期なりに心豊かに生きたいと思っている一人の人間であることをまずは認め、お互いにやりとりし合い（相互交渉）ながら、互いにより心豊かになるように輔け合って生きていきましょう（相互輔生）、ということである。

（2005 年 10 月 17 日　記）

「キレ」防止に3歳までの愛情大切　文科省検討会が提言

2005年10月12日19時47分

「キレる子」にしないためには乳幼児期の家族の愛情や生活リズムの定着が大切だとする提言を文部科学省の「情動の科学的解明と教育等への応用に関する検討会」（座長・有馬朗人元文相）が１２日まとめた。

提言は、人間の情動は5歳ごろまでに原型が作られると指摘。「その後の取り返しは不可能ではないが、年齢とともに困難になる。３歳ごろまでに母親をはじめとする家族の愛情を受けるのが望ましい」と述べている。

脳内でコミュニケーションや意欲をつかさどる「前頭連合野」の発達は8歳ごろがピークで、２０歳ごろまで続くとも述べ、乳幼児から小学生までの教育の大切さを強調する内容になっている。

一方、テレビやゲーム、インターネットなどが心に与える影響については「十分なデータがなく、一層の研究が必要」と述べるにとどまった。